



シュウメイギク

八王子市立第四・第十・大和田小学校

放課後の子ども教室 圃墓教室だより

61号 2021年10月

編集 成田 滋 shigerunarita@gmail.com

ブログ <https://naritas.jp/wp1/>

八王子園墓連盟 <https://hachigoren.com>



◆10月の放課後の子ども園墓教室の日程です

第四小学校：10月4日、11日、18日、25日 2時30分～ 三階 ひらめき教室

第十小学校：10月1日、8日、22日、29日 2時30分～ 一階 家庭科室

大和田小学校：10月6日、13日、20日、27日 2時30分～ 二階 第二音楽室

◆子どもに読み聞かせたい本 その1「最後の授業」

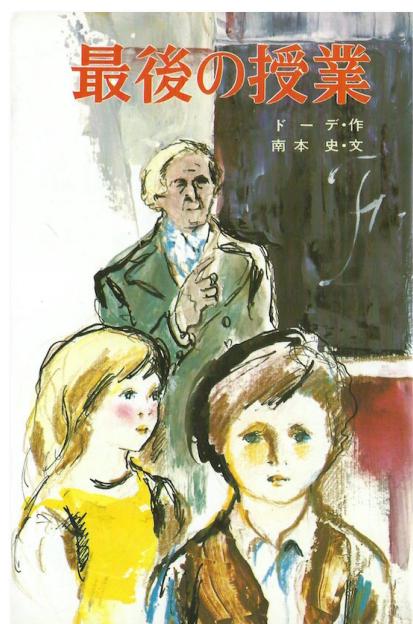
定 年退職を機に、持っていた本を整理することにしました。移り住むことになった東京の家がコンクリートの長屋なので、保管する場所がなかったからです。以前は研究室という誠に都合の良い保管場所がありました。そこを去るにあたり二つの決心をしました。「専門書は棄ててまだ読んでいない本を残す」、「学生時代に心に残った本を読み直す」ということです。専門書のほとんどは、古紙の回収業者のところに持っていました。

高校時代に、一教師より「沢山の小説を読むように」と言われたのが私の読書のきっかけとなりました。それ以来、受験勉強の傍ら、大学での予習復習の合間に随分読むことができました。今、すっかりした本棚にはこれから紹介したい本が積んであります。私の父も本の虫でした。定年後は部屋に閉じこもってはむさぼるように本に食い入っていました。そして、「『ユリシーズ』はなんど読んでもわからない」とか“戦争と平和はすごいけど、誰が誰だったかがわからなくなる”などといっていました。

私は父ほどの愛読家ではありません。このシリーズでは自分の糧になつた、あるいはなっていると思われるものを選んで、読書にさらに傾注する意欲を高めたいとキーボードに向かうことにします。

「最後の授業」は 1873 年に出版されたアルフォンス・ドーデ(Alphonse Daudet)の短編小説集です。フランス領アルザス(Alsace)地方の学校での話です。少年、フランツ(Franz)は学校に遅刻します。いつも担任のアメル(Amel)先生は厳しく、生徒は鞭で打たれることもあるのです。その朝、先生はいつもと違つて優しく坐るようにとフランツに言います。フランツは緊張します。教室に元村長など大人たちがいるではありませんか。アメル先生は生徒と大人たちに対して、「自分が授業をするのはこれが最後です」と話し始めます。

1871 年 5 月におきたプロイセン(Prussia)王国との戦争でフランスが負けたため、アルザス地方はプロイセンに割譲され、ドイツ語しか教えてはいけないことになったのです。フランス語を教えるアメル先生は学校を辞めることになります。今日がフランス語の最後の授業だということです。



アメル先生はフランス語を学ぶことの大切さを教えます。その時、プロイセン兵のラッパの音が響きます。アメル先生は黙って黒板に”フランス万歳”と書いて「みんな帰えりなさい」と手で合図し「最後の授業」を終えるのです。1953年に教科書から学んだ一つです。お陰でヨーロッパや世界史に関心が向くきっかけとなった小説です。小学生も十分理解できる素晴らしい本です。